西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.15　2006年11月号

以前、京セラ名誉会長 稲盛和夫氏の「人生の方程式」をご紹介しましたが、今月は同氏の「能力を未来進行形でとらえる」という話をご紹介します。

京セラを創業したばかりのころ、受注を増やすために客先へ売り込みに行くと、決まって技術的に難しい製品の依頼が来たそうです。それもそのはずで先発の大手セラミックメーカーがたくさんあるなか、創業したばかりの無名の零細企業である京セラには大手が断ったものしか注文が来なかったためです。でも、難しいからといってそれを断っていては会社はやっていけません。そこで稲盛氏は、その時点ではできない製品でも「できます」と言って受注してきたそうです。ところが、そうして会社に戻って来ると「とても無理です」と言い出す人がいて、みんながやる気を失いかけることもあったそうです。そんなとき稲盛氏は、「いまの能力で難しいことは十分承知している。だが、納期まで試行錯誤を繰り返すなかで、私たちの能力は必ず進歩していくはずだ。できると嘘をついてきた注文でも、決して嘘にはしないんだと懸命に努力して完成させれば、嘘をついたことにはならない。納期まで必死にがんばり、製品を完成させよう」と説いたそうです。

実はこれと同じような話を別のところでも聞いたことがあります。実績というのはすでに「ある」ものではなく、自分で「つくる」ものだという話です。道に迷っていた外国人に英語で道案内をした程度のことを、自分のプロフィールには「外国からのビジターに対する日常的なサポートが英語でできます」などと書いてしまうそうです。それによってもしも海外からのお客様のサポートをまかせられるような仕事に恵まれたとしたら、この次は「外国のエグゼクティブの通訳として活躍」などとプロフィールに書いてしまうそうです。もちろん、それによって得た仕事をこなすためには死に物狂いで努力する必要があります。ただ、やりすぎると学歴詐称などと同じような問題が起こる可能性はありそうですが‥‥‥。

最後に稲盛氏の言葉をもうひとつ。

「能力を未来進行形でとらえることができる者が、困難な仕事を成功へと導くことができる。何としても夢を実現させようと強く思い、真摯な努力を続けるならば、能力は必ず向上し、道はひらけるのである。」